

令和5年度 大泉西小学校・学校評価

(1) 概要

年度当初に策定した計画のうち一定程度の水準に達した項目もあったが、本校の最優先課題であるはずの「学力向上への取組」などは十分な成果を上げることができなかった。

この大きな要因として、教職員の目標達成への意識がやや希薄だったことを上げざるを得ない。成果目標はともかく、取組目標でマイナス評価がつくということは本来考えられないことである。もちろん、どの教職員も児童に対する指導に関して手を抜いたということでは決して無い。しかし、眼前の指導や分掌業務の遂行に意識が向き、年間を通して取り組むべき大目標に視野が向かなかったことも事実である。

この改善は次年度の課題として学校全体として肝に銘じていくべきものである。

反面、保護者評価では昨年度よりも高く評価されたものが多い。今後も保護者や地域との連携を密にして、適切な教育活動の推進を図っていきたい。

(2) 根拠となる資料

	具体的方策及び目標	評価	自己評価結果 (保護者・児童のコメントの主な意見等)	自己評価を踏まえた 次年度の改善策
(1) 子どもに夢と気概を育む	取組目標 学校図書館司書と学級担任が合理的な連携を図り、全学級で週1回以上の図書室の利用を図る。	○	殆どの学級で実施できたが、6年生については教科指導を滞り無く進めていく必要性から毎週実施するまでには至らなかった。	どの学年でも達成できるよう目標値を再検討すると共に、図書室の利用が読書好きな児童の育成に直結するよう、取り組み方の更なる改善を図る。
	「教えて褒める」という基本原則に基づいて児童を指導することで、学習への意欲を喚起させる。	○	全教員が意識して取り組んできており、自己評価は高くなっている。反面、その達成水準について各自の認識に差異があり、児童の意識に結びついていない状況もある。	名人と呼ばれる授業者のビデオを再視聴し、褒めるということの水準を全員で確認する。その共通理解に従って、取組を進めていく。
	担任と副担任は1か月に1回以上、教科指導や特別活動の時間などに子ども一人一人に対して、将来の夢を問い掛ける。	▼	学級により取組に濃淡が生じている。さほど難しい取組ではないため、教職員が絶えず意識できていたかの個人差が結果に反映されたと考える。	月1回、モニタリングの時間を設定して、教職員一人一人が着実に意識化できるようにする。
	成果目標 読書が好きと回答する児童の割合を80%以上にする	○	78.4%という結果であり、ほぼ達成できていると評価している。ただ、新たな取組を追加すること等によって、より一層の向上も図れるのではないかと推測している。	プロジェクトチームを立ち上げ、どのようにしたらより一層「読書好き」の児童を増やすことができるか検討を進めていく。
	各学期末アンケートで「できたこと・よかったことを先生から褒められて嬉しかった」と回答する児童を90%以上にする。	▼	アンケートでの設問が本項と合致しなかったため、正確な値が計測できていない。実際に管理職が児童から聞き取ると、否定的な意見が多く聞かれている。	学期ごとの児童アンケートでの結果を元にその都度、教職員一人一人が改善策を策定する。また、校長による日々の授業観察で結果を元に指導を強化する。
	年度末の児童アンケートで「将来の夢、就きたい職業がある」と回答する児童の割合を80%以上にする。	○	89.5%と目標値を上回ることができた。しかし、学年進行に伴って低下している現状があり、学校全体として更なる取組の強化が必要である。	今年度の取組を継続する。その中で高学年になっても夢や希望を保持できるよう、各担任に学級ごとの取組を策定させる。
(2) 自尊感情を高める	取組目標 各種コンクールに各学級で在籍児童数の70%以上を応募させる。	▼	図工作品や作文などについては応募を重ね、3年生は「夢を叶える作文コンクール」で学校賞を獲得した。反面、多くの学級で目標値には届かなかった。	コンクールの応募を積極的に進める意義をもう一度再確認する。また、担当教員を一人指名し、そのリードの下で取組を推進していく。
	担任の他、管理職も率先して暗唱に取り組む子どもと関わり、年間を通し、全校的な活動として推進する。	○	学級によって取組に大きな差異がある。多くの児童が積極的に校長室までテストを受けに来る学級もあれば、殆ど取り組まなかった学級もあった。	次年度は「大西小 名詩・名文集」を製作して児童一人一人に配布することで、教員が常に暗唱を進めることの意識を保持できるようにする。
	成果目標 「自分には(※自慢できるような)良いところがある」と回答する児童90%以上。	▼	71.1%という結果であった。保護者アンケートでも68.1%という結果であり、昨年度の71.1%からも低下している現状である。本校の最大の課題である。	取組目標に設定した方策を着実に実行すると共に、家庭とも密接に連携した新たな取組の構築も図っていく。
	年度末までに名詩・名文を一人3作品以上、学級平均8作品以上、暗唱できるようにする。	▼	共有フォルダ内にある詩文集を使用して暗唱に取り組むことになっていたのだが、暗唱ではなく教科書教材の音読しか行っていない学級も数多く見られた。	毎月のモニタリングの際に、担任が状況を専用シートに記入していくようにする。それによって翌月以降の取組について再検討できるようにする。
(3) 集中力と持続力	取組目標 卒業までに児童全員が水泳25m完泳、逆上がり、開脚跳び、二重跳び連続5回ができるように、各々細かなステップと学年ごとの達成目標を設定する。	▼	年度当初、体育主任が仮の案を作成したのだが、それが周知されず、各学年が思い思いの目標を立てて取り組んでしまった。	次年度当初に原案を検討する場を設定し、それを受けて学年単位で取組方法を策定する。途中経過はモニタリングシートに記入していく。
	各学級で「1学級1取組」における具体的な数値目標の設定と、月1回の継続的なモニタリングを行ない、一人一人の児童の着実な体力向上を図る。	▼	「1学級1取組」は殆どの学級で順調に進めることができたが、それについての月1回のモニタリングが不十分であった。	これもモニタリングシートに毎月記入することで、各教員の着実な意識化を図る。達成困難な場合には体育主任と協議して、目標値の修正を図る。

を醸成する	「いじめ発見のチェックシート」(練馬区)と「大泉西小いじめ発見・対応マニュアル」(別紙)による児童の定期的観察を着実に実施する。	○	予定通りに実施し、大きな問題の発生を防ぐことができた。ただ、チェックシートを各自が詳細に読み込んでいたかどうかとなると疑問符が付く教員もいた。	学期1回程度、チェックシートの読み合わせを行うことを生活指導主任は取組項目として自己申告書に記載する。これによって全教職員に内容項目の意識化を図る。
	放課後5分程度を使って、その日の児童に関する事実を記録簿に記入する。	▼	殆どの教職員は着実に行なうことができたが、放課後5分という時間帯に間違いなく行なっていたかどうかとなると、不十分な教職員もいた。	児童理解の基礎となる取組であることを各教職員が認識すると共に、勤務時間終了時に5分間の作業時間を設定する。
	管理職による1日1回以上の施設の目視点検、及び全教職員による学期1回以上の施設点検を実施する。	○	予定通りに実施した結果、校庭に埋没していたガレキなどを発見し、速やかに除去することができた。また、教室や廊下の掲示板にあった画紙の破片も全て除去できた。	次年度も取組を継続し、児童にとって安心・安全な環境整備をより一層推進していく。
	年度末に水泳25m完泳、逆上がり、開脚跳び、二重跳び連続5回ができるように、学年ごとの目標を達成する。	▼	上記項目の通り、全校での統一した取組が不十分であったため、結果も数値では十分把握できないような曖昧なものとなっている。	これもモニタリングシートに毎月記入することで、学級全体として取組が不十分な項目を明確化したり、特に指導が必要な児童への個別指導を強化したりする。
	各各学級の「1学級1取組」の重点項目の伸び率を「練馬区の伸び率×1.2」以上向上させる。(—	本項目については次年度の「体力・運動能力テスト」の結果を待って評価したい。	
	社会通念上、いじめ及び類似事案と認識できる案件の発生数を年間5件以内、仮に発生したとしても解決時の保護者満足度100%とする。	○	社会通念上、いじめ及び類似事案と認識できる案件は5件以内であり、その後に混乱が継続しているものは皆無である。	次年度も取組を継続し、児童にとって安心・安全な環境整備をより一層推進していく。
	「困ったことがあったら担任に相談できる」回答する児童の割合を90%以上、「副担任に相談できる」と回答する児童の割合を90%以上にする。	▼	担任を含めて相談できる大人がいる児童は85.2%であるが、副担任も含めた他教員に相談できる児童は70.3%に過ぎない。副担任制の強化や学年での連携が必要である。	副担任制の強化は複数の視点から児童を観察する目的の元に進めるものであることを全教職員が共有化すると共に、モニタリングで状況把握を図る。
年度末の保護者アンケート「安全への十分な配慮」での肯定的評価を90%以上にする。	○	89.6%という結果であり、ほぼ達成することができたと評価している。アンケートの記述欄にも肯定的に評価する意見が多かった。	否定的評価が10%程度あることを鑑み、不安に思う点があればオンタイムで申し出ただけよう、学校側の受信体制を強化していく。	
(4) 基礎学力を保障する	年度末までに習熟度に応じた弾力的な大泉西小版・算数指導計画を作成する。	▼	算数少数担当が作成を進めてきたが、3学期に担任代行となったため、作業がそこで滞っている状況である。	2学期までは大泉西小版・算数指導計画に従って指導していくと共に、次年度中に3学期分の指導計画の着実な立案を図るようにする。
	ユニバーサルデザインに基づいた授業設計を学ぶため、全教員が月1回程度の模擬授業研修を受講する。	○	出張などの止むを得ない事情を除き、全員が毎月研修を受講することができた。	次年度も取組を継続すると共に、研修講師の変更なども行い、より新しい視点に基づく教職員の学びも進めていく。
	タブレット端末を活用した授業を全教員が毎週3回以上行う。その記録を校務支援システムの中のフォルダに格納させ、学校の共有財産とする。	▼	タブレット端末を活用した授業は練馬区内の他校と比較しても高水準で実施できた。しかし、その記録の格納は行なわれておらず、共有化は図られていない。	研究部とICT担当の担当業務として位置付け、フォルダへの格納状況を各学期末に状況を全体に周知させる。
	標準学力調査「算数」の一人一人の正答率を今年度比で5%向上させると共に、一人一人の算数ワークテストの「知識・技能」の3学期平均正答率を1学期比で10%向上させる。	▼	向上どころか、低下した学年も複数あった。最も成果が上がっていない項目であり、大いに反省すべきところである。取組方法の抜本的な改善を図っていく必要がある。	年度当初に新たな取組方法を全教職員で検討し、それに従った指導法を全校で進めると共に、夏季休業中に研究部に成果を検討させ、オンタイムでの改善を図る。
「4月よりも何となく算数が楽しくなってきた」と回答する児童を90%以上にする。	○	89.9%とほぼ達成できたと評価している。しかし、上欄の項目の通り、それが結果に直結していない以上、課題は残る。	大泉西小版・算数指導計画で策定した習熟度に応じて工夫した指導法を各々行なうことで、より多くの児童が算数を楽しめるようにする。	
(5) 他者意識を育む	全教員が児童にあいさつ等のマナーや校内外のルールを遵守させるための取り組みを策定し、それを自己申告書に記載する。	○	全教職員が自己申告書に記載し、それに則って指導を進めてきた。下欄の通り、それが成果にも直結している。	かなりの高水準に達している状況を維持できるよう、この取組を次年度も継続していく。
	縦割り班の活動を月1回以上実施する。コロナ禍で困難な場合は手紙交換などの機会を意図的に設定する。	○	今年度開始した取組であるが、担当者及び推進役である6年生児童の努力によって、大きな成果を上げることができた。	運動会などの行事にも縦割り班により活動が組み込むなど、今年度以上の工夫を進めていく。
	年度末の保護者アンケート「あいさつ」「ルール」に関する設問への肯定的回答90%以上にする	○	挨拶が85.3%、ルールが95.3%であった。挨拶は目標値に届かなかったが前年比で8.7%向上しており、徐々にではあるが、改善されつつあると評価している。	上欄の方策により、挨拶する習慣の定着化をより一層進めていく。ルールの遵守についても気を弛めることなく、着実な取組を継続していく。
児童アンケート「同じ縦割り班のメンバーに対して親しみがある」と回答する児童の割合を80%以上にする。	○	88.5%であり、目標値を上回ることができた。初年度としては大成功した取組であると評価している。	現5年生が既に意欲的な姿勢を示しており、教職員全員がこれを積極的に支援することで、次年度は班内の親密度がより高まるよう取組を進める。	